



大阪城は誰が建てたか? : 使役連続性を超えて : 日韓対照の観点から (西光義弘教授還暦記念号)

鄭, 聖汝

(Citation)

神戸言語学論叢, 5:21-33

(Issue Date)

2007-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001522>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001522>



大阪城は誰が建てたか？ ——使役連続性を超えて：日韓対照の観点から——*

鄭 聖汝

大阪大学

(要旨)

従来の使役研究では、使役状況が表す意味と使役形式が表す意味との間に不一致が生じた場合、状況が表す意味を重視するか、表現形式が表す意味を重視するか、という問題について、しばしば研究者間の意見が一致しないことがあった。それは、Shibatani & Pardeshi (2002)による「使役連続性」が提案された今もなお、未解決である。本稿では、この問題について、使役構文の意味解釈には、使役形式だけでなく、名詞句の意味が関与する場合があることを明らかにし、形式と意味の対応関係を考える際に、鄭(2006)で提案された「個体モデル」と「社会モデル」の二つの機能モデルを仮定する必要があることを主張する。

1. はじめに

次の例を見られたい。

- (1) a. 大阪城は誰が建てたか。 b. 山田部長は昨日髪を切った。
c. メアリーは新しくドレスを作った。 d. 太郎が注射をした。

上の他動詞文は次のような特徴を示すものとして知られている。(i)主語が直接的に動作を行う場合と、間接的に行う場合の二通りの意味解釈が可能である。(ii)間接的に動作を行う解釈では、現実世界では実際に動作を行う介在者(動作主の被使役者)が存在する。しかし、(iii)それは言語化されず、したがって使役構文ではなく、他動詞構文が対応する(Ikegami 1982, 河上1996, 佐藤2005, 澤田2006など)。

Ikegami (1982)によれば、たとえば(1a)に対する答えとして「職人が大阪城を建てた」と答えれば、直接使役者による直接使役であるが、「秀吉が大阪城を建てた」と答えれば、支配者秀吉の命令により職人が建てたと解釈されるので、間接使役者による間接使役であるとされる。この場合、間接使役が直接使役と同様に他動詞構文形式を取るのは、オーソリティ(authority)が関与するためであるという(cf. 佐藤2005)。すなわち、使役者のオーソリティを通して、他動詞構文に間接使役が対応するということである。一方、河上(1996: 56)によれば、前者の解釈は字句通りの読みであり、後者の解釈はメトニミーのメカニズムが関与することによって算出される。また後者の解釈で文を生成する際にも、メトニミーのメカニズムの関与は不可欠であることが示唆される。ところが、オーソリティの概念やメトニミーの関与が、具体的にどのように、実際の使役状況にある被使役者を削除し、その情報を失わずに他動詞構文形式の中に包み込むことができるか、というそのメカニズムについては何も明らかにされていない。

本稿では、(1)の他動詞文が表す意味を上での先行研究とは異なる角度から光をあて、このような他動詞構文が生成されるメカニズムを明らかにしたい。次の三つの問題提起をする。(i)(1)のように、現実世界では動作主の被使役者(agent causee)が存在する間接的な使役状況

に、なぜ他動詞構文が対応しうるのか。(ii)動作主の被使役者は、なぜ言語化されなくてよいのか。この場合、(iii)使役形式と使役意味の対応関係はどのように考えるべきか。とりわけ、(iii)に関しては70年代のShibataniの使役研究を皮切りに、最近ではShibatani & Pardeshi (2002), Shibatani & Chung (2002)による「使役連続性」の概念が提案されている。しかし、使役連続性の概念が導入されても(i)と(ii)の問題は解決できず、(1)を使役連続性の上に正しく位置づけることが困難である、という問題がある。

したがって本稿の最終的な目的は、使役連続性を超えて、形式と意味の対応関係に対する新たな見方を提示することである。具体的には、鄭(2006)で提案された「個体モデル」と「社会モデル」の二つの機能モデルを導入し、(1)の間接的な使役状況の解釈は、名詞句の意味が文の意味解釈に関与する「社会モデル」において起こる現象であることを示す。

2. 使役連続性と随伴使役

70年代のShibataniの使役研究では、使役形式と使役意味の対応関係は2項対立的なものであり、1対1の対応を示すものであった(Shibatani 1973a, b, 1975, 1976など)。すなわち、(2a)の語彙的使役は、(2b)のような単文構造を持ち、直接使役の意味(すなわち物理的操作の状況)を表すが、(3a)の生産的使役は(3b)のような複文構造を持ち、間接使役の意味(すなわち指示的使役の状況)を表す。この場合、語彙的使役には一つの動作主(使役者)と被動者の被使役者が関与するが、生産的使役には二つの動作主(使役者と被使役者)が関与するとされる。

- (2) a. 花子_iが 太郎_jに 自分_{i/*j}の部屋で服を着せた。 (語彙的使役：直接使役)
 b. [s 花子が太郎に自分の部屋で服を着せた] (統語構造)
- (3) a. 花子_iが 太郎_jに 自分_{i//j}の部屋で服を着させた。 (生産的使役：間接使役)
 b. [s₁ 花子が [s₂ 太郎が自分の部屋で服を着] させた] (統語構造)

それから約30年後、Shibatani & Pardeshi (2002)と Shibatani & Chung (2002)では70年代のShibataniの使役研究を再検討し、直接使役と間接使役の間には中間的範疇(intermediate category)として随伴使役(Sociative causation)が存在することを明らかにし、使役連続性(causative continuum)を提出した。この随伴使役には同伴行為使役、補助使役、監督使役の三つの使役状況が与えられ、二つの動作主(使役者と被使役者)が関与するものの、間接使役とは異なるものとして特徴付けられる。この提案によれば、使役の意味は直接性の軸に沿って連続的に分布し、使役形式と使役意味の間には1対1の対応関係は示さないこととなる。また直接性の程度は、使役事態と被使役事態の二つのイベントの間に時間的・空間的オーバーラップがあるかどうか、あるいはどれぐらいオーバーラップがあるか、が基準となる。これを日韓対照の観点から図示すると、次のようになる(Shibatani & Chung 2002, Shibatani & Pardeshi 2002 参照)。

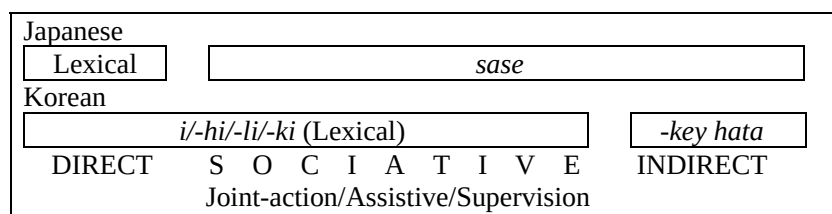


表1 日韓両言語の使役形式の分布が見せる意味地図

表1によれば、随伴使役は直接使役と間接使役の中間に位置し、それぞれ日本語では生産的使役が、韓国語では語彙的使役がそれを担っている。したがって、従来のように語彙的使役＝直接使役、生産的使役＝間接使役のように1対1の対応関係は示さない。たとえば、次の日本語の例はすべて生産的使役であるが、(4)では随伴使役の三つの状況(同伴行為、補

助、監督)を表し、(5)では間接使役の指示的使役の状況を表す。一方、韓国語では語彙的使役 *-i/-hi/-li/-ki* が、(6)のように、随伴使役の三つの状況を担っている(詳細はShibatani & Chung 2002参照)。

- (4) a. 母親が子供を遊ばせている。(同伴行為)
 b. 母親が子供におしっこをさせている。(補助)
 c. 母親が子供に本を読ませている。(監督)
- (5) a. 母親は子供に公園で遊ばせた。(間接)
 b. 母親は子供に公園で歩かせた。(間接)
- (6) a. Emeni-ka khun ay-nun kel-li-ko, cakun ay-nun tung-ey
 母親-主格 大きい 子供-主題 歩く-使役-接続 小さい 子供-主題 背中-所格
 ep-ko cang-ey ka-ss-ta. (同伴行為)
 おんぶする-接続 市場-所格 行く-過去-断定
 ‘母親が上の子は歩かせ、下の子は背中におんぶし、市場へ行った。’
- b. Emeni-ka ai-eykey ocwum-ul nwu-i-ko iss-ta. (補助)
 母親-主格 子供-与格 おしっこ-対格 する-使役-ている
 ‘母親が子供におしっこをさせている。’
- c. Emeni-ka ai-eykey nayngpang-eyse chayk-ul ilk-hi-ess-ta. (監督)
 母親-主格 子供-与格 冷たい部屋-所格 本-対格 読む-使役-過去-断定
 ‘母親が子供に冷たい部屋で本を読ませた。’

このように従来の直接使役と間接使役の 2 項対立的な考え方を再考して、使役連続性を提案したことで、形式と意味の対応関係に関する 70 年代の統語基準の考え方に対する修正が行われる。すなわち、形式は統語構造との対応を通して意味が解釈されると見なした従来の考え方に対して、使役形式は使役状況と直接対応し、それを通して意味が解釈されるものとして捉えなおされたのである。したがって、使役連続性の提案は、使役研究に新しい方向性を提示したという点において、大きな意義がある。

3. 問題点：使役状況と使役形式の不一致

ところが、使役連続性の概念は、使役状況と使役意味の関係をどう捉えるかに関しては、基本的には従来の考え方を踏襲していることがわかる。すなわち、使役連続性の概念は、上述のように、まずは直接性の程度に還元され、さらにその直接性の程度は、使役事態と被使役事態の二つのイベントの間に時間的・空間的オーバーラップがあるかどうか、あるいはどれぐらいオーバーラップがあるかという、その状況が表す、客観的・物理的な尺度を道具立てとしているからである。したがって、(1)のような例が現れたときには、それをどのように扱うべきか、という問題が生じることが予想される。

以下では、使役状況と使役形式の対応において、表1の提案と不一致が生じている例を五つの側面から取り上げ、使役連続性の考え方に問題点が残されていることを指摘する。

まず第一に、表1によれば、日本語の語彙的使役は直接使役としか対応しないが、次のように、二つの動作主を持ち、指示的使役の状況を表す場合がある。

- (7) a. 母親が子供を二階に上げた。(操作／指示)
 b. 母親が子供に二階に上がらせた。(指示)

(7a)は二通りの意味解釈が可能である。一つは、母親が子供を抱き上げて直接二階に上げる場合の物理的操作の状況である。もう一つは、母親が子供に、たとえば「もう寝る時間だよ、二階に上がって」と言って、子供を二階に上げる(実際は子供が自ら歩いて二階に上がる)場合の指示的使役の状況である。前者の読みでは、使役事態と被使役事態の二つのイベ

ントの間に(客観的に誰が見ても)時間的・空間的オーバーラップがあるとされるので、この状況をもって直接使役の意味を表すと判断するには何ら問題がない。ところが、後者の読みでは、その状況から、二つのイベントの間に時間的・空間的オーバーラップがあると見るには相当無理がある。客観的な状況から見ると、(7a)が表す指示的使役の状況は、(7b)の生産的使役が表す指示的使役の状況と何ら変わりがないからである。

Shibatani (1973a, 1976) によれば、「慣習化された目的」(conventionalized purpose)がある場合には、語彙的使役も指示的使役の状況を表すことができる、と説明される。しかしそれにしても、次のような疑問は相変わらず残る。(i)慣習化された目的がある場合には、なぜ指示的使役の状況に語彙的使役が対応しうなのか。(ii)語彙的使役の「指示」は生産的使役の「指示」とどう異なるのか、または、同じなのか。(iii)表1が示すように、この場合の語彙的使役も直接使役と見るべきかどうか。

これらの問題に関して、使役連続性の概念は十分な説明が与えられない。つまりここには、使役形式と使役意味の対応を考える際に、使役状況が表す意味(客観的な意味)を重視するのか、使役形式が表す意味(言語的な意味)を重視するのか、という研究者間の言語観の相違によって異なる結論が導かれる可能性があることがわかる。すなわち、前者を重視すれば、語彙的使役も間接使役を表すと判断され、一方後者を重視すれば、直接使役を表すと判断されることになるだろう¹。

第二に、上述のように、現実世界では実際に動作を行う被使役者が存在するが、それを言語化せずに、その状況を他動詞構文(または語彙的使役文)で表現する場合が多く見られる(Ikegami 1982, 河上1996, 佐藤2005, 澤田2006, 鄭2006参照)。

- (8) a. お客さんがタクシーを止めた。
- b. 山田部長は最近新しい家を建てた。
- c. 山田部長は昨日三宮で髪を切った。
- d. 母親がピアノを二階に上げた。(引越しのとき)
- (9) (伸ちゃん、今何しているの、という答えに対して)
- a. 今、ご飯食べているよ。(母親に直接食べさせてもらっている状況の場合)
- b. 今、足を洗っているよ。(母親に洗ってもらっている状況の場合)

(8)では、使役者の何らかの指示や依頼などにより、運転手がタクシーを止め、大工さんが家を建て、理髪師が髪を切り、引越し業者がピアノを二階に上げる、という解釈が得られる。しかし、ここには実際に動作を行った運転手、大工さん、理髪師、引越し業者は言語化されていない。また(9)では、実際には母親にやってもらっている状況であるが、子供の言語表現であれば、動作主の母親を言語化しなくても許される。この状況から見ると、Ikegami (1982)の説明のように、使役者のオーソリティを通して間接使役が他動詞構文に対応する、という説明だけでは不十分であるように思われる。

ここで注目されたいのは、Ikegami (1982)はこれらの文を間接使役と判断しているのに対して、表1では直接使役であるとされることである。すなわち、ここでも、文の意味を考える際に、使役状況が表す意味を重視するのか、表現形式が表す意味を重視するのか、による学者間のずれが見られるのである。

第三に、現実世界では同一事態だが、言語的には異なる三つの構文が対応する場合がある。

- (10) a. ヒトラーが何百万人ものユダヤ人を殺した。
- b. ヒトラーが兵士に命じて何百万人ものユダヤ人を殺した。
- c. ヒトラーが兵士に何百万人ものユダヤ人を殺させた。

(10a)と(10b)は両方とも語彙的使役が用いられており、文字通りに解釈すれば、前者ではヒトラーが直接ユダヤ人を殺したと解釈されるので、後者とは異なる意味を伝える。しかし、普通の解釈では、前者も言語化されていない兵士が勝手に読み込まれてしまい、実際に動作を行ったのは兵士であるとされ、両文は同じ事態を指し示すことになる。一方(10c)は、語彙的使役「殺す」にさらに生産的使役を付加しているが、それにもかかわらず、上の両文と同じ事態を表すことができる。この三つの構文が共通に表す使役状況をビリヤードボール・モデル式 (Langacker 1991, Croft 1991, Talmy 1985参照)に図示すれば、次のようになる。

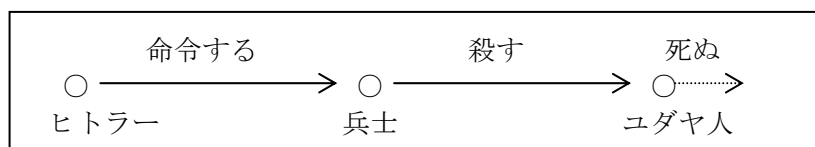


表2

つまりここには、動詞の使役形式の違いのみならず、(10a)と(10c)のように統語構造(項構造)がまったく異なるもの同士も、同一事態を指し示すことができる、という問題がある。また、(10a)を表1に従って直接使役と見るか、使役状況が表す意味を基準に間接使役(あるいは監督使役)と判断すべきか、という問題もある。

第四に、韓国語では一つの使役形式(語彙的使役)に三つの異なる構文が対応し、三つとも間接的な使役状況を表すことができる場合がある(鄭1999, 2005, 2006. cf. Song 1988)。

- (11) a. Emeni-ka ay pal-ul ssis-ki-ess-ta. (語彙的使役: 直接的／間接的)
母親-が 子供の 足-を 洗う-使役-過去-断定
‘母親が子供の足を洗った。’
- b. Emeni-ka hanye-lul sikhye ay pal-ul ssis-ki-ess-ta. (語彙的使役: 間接的)
母親-が 下女-をさせて 子供の 足-を 洗う-使役-過去-断定
‘母親が下女に命じて、子供の足を洗った。’または、
‘母親が下女をして、子供の足を洗わせた。’
- c. Emeni-ka hanye-eykey ay pal-ul ssis-ki-ess-ta. (語彙的使役: 間接的)
母親-が 下女-に 子供の 足-を 洗う-使役-過去-断定
‘母親が下女に子供の足を洗わせた。’
- (12) a. Cangkwun-i pwuhatul-uy meli-lul kkak-i-ess-ta. (語彙的使役: 間接的)
将軍-が 部下たち-の 頭-を 切る-使役-過去-断定
‘将軍が部下たちの頭を散髪させた。’
- b. Cangkwun-i ipalpyeng-ul sikhye pwuhatul-uy meli-lul kkak-i-ess-ta.
将軍-が 理髪兵-をさせて 部下たち-の 頭-を 切る-使役-過去-断定
‘将軍が理髪兵に命じて部下たちの髪を切った。’または、
‘将軍が理髪兵をして部下たちの頭を散髪させた。’ (語彙的使役: 間接的)
- c. Cangkwun-i ipalpyeng-eykey pwuhatul-uy meli-lul kkak-i-ess-ta.
将軍-が 理髪兵-に 部下たち-の 頭-を 切る-使役-過去-断定
‘将軍が理髪兵に部下たちの頭を散髪させた。’ (語彙的使役: 間接的)

(11)と(12)では、一つの動詞に三つの異なる構文がそれぞれ対応している。(11a)と(12a)は実際に存在する動作主の被使役者を言語化していない場合であり、(11b)と(12b)は言語化しなくてもよい被使役者を付加詞名詞句としてコード化した場合である。これに対して、(11c)と(12c)は被使役者が与格名詞句としてコード化された場合である。客観的な状況から見た場合、この三つの構文が表す意味は、使役者(母、将軍)が被使役者(下女、理髪兵)に

命令をすると、その命令を受けた被使役者が子供の足を洗う、部下たちの髪を切るなどの動作を行う、という点で一致しており、間接的な使役状況であると解釈される。

ここで注目されたいのは、(11a)と(12a)の間に見られる解釈の優先順位の逆転である。すなわち、前者は間接的な読みもできなくはないが、普通に解釈すれば、母親が直接子供の足を洗ってあげるという直接的な状況が優先的に解釈される。しかし、後者では、直接的な状況として解釈することはむしろ困難で、将軍が理髪兵に命じて部下たちの髪を切らせてあげたという間接的な状況が優先的に解釈される²。このような相違はどこからくるのだろうか。使役形式も構文も同じであることを考えると、その違いは二つの名詞句——母親と子供、将軍と部下、または、母親と下女、将軍と理髪兵——の関係が表す意味の相違でしかあり得ない(詳細は鄭2006参照)。すなわち、使役者と被使役者の二者間の社会・家族関係の役割に関する我々の知識構造が関与し、それぞれの使役状況が解釈されたと考えられるのである。ここに使役形式だけでなく、名詞句も使役状況の解釈には関与的であるといえる状況がある。

最後には、韓国語では語彙的使役と二重使役がほぼ同じ意味を表し、さらに項構造までも同じである場合がある(鄭1999)。

- (13) a. Emeni-ka hanye-eykey ay pal-ul ssis-ki-ess-ta. (語彙的使役: 間接的)
 母親-が 下女-に 子供の足-を 洗う-使役-過去-断定
 ‘母親が下女に子供の足を洗わせた。’
 b. Emeni-ka hanye-eykey ay pal-ul ssis-ki-key ha-yess-ta. (二重使役: 間接的)
 母親-が 下女-に 子供の足-を 洗う-使役-使役-過去-断定
 ‘母親が下女に子供の足を洗わせた。’

上の二つの文は、母親が下女に命令をすると、その命令を受けた下女が子供の足を洗う、という点において両者が同じ事態構造を表すが、それだけでなく、動作主の被使役者を与格名詞句にコード化し同じ項構造をもっている、という点においても同じである。

語彙的使役と生産的使役が同じ項構造で現れるのは次のように日本語にも見られる現象である(定延2000, 鄭2006参照)。ただし、ここでは動作主の被使役者は言語化されない。すなわち、(14a)では警察(個人)が自分の家にその女を直接監禁したと解釈されるのに対して、(14b)では、警察当局がその女を言語化されていない動作主の被使役者を介して、自宅監禁したという解釈が得られるのである。

- (14) a. 警察がその女を自分の家に監禁した。(語彙的使役: 直接的)
 b. 警察がその女を自分の家に監禁させた。(生産的使役: 間接的)

以上のように、使役状況が表す意味は、使役形式との対応関係においてのみ不一致があるだけではなく、統語構造(項構造)との対応においてもねじれが生じていることがわかる。次節では、名詞句の意味解釈の観点から形式と意味の対応関係を捉えなおし、これらの現象に対する統一的な説明を与えたい。

4. 個体モデルと社会モデルの導入

鄭(2006)では、使役構文の意味解釈には名詞句の意味が関与する場合としない場合があることを観察し、「個体モデル」(Individual model)と「社会モデル」(Social model)という概念化レベルの異なる二つの機能モデルを提案した。すなわちこの提案によれば、ある客観的事態を基に概念化が行われる際に、物理的空間を対象とする「個体モデル」で概念化が行われるか、それとも社会的空間を対象とする「社会モデル」で概念化が行われるかによって、異なる形式(または構文)が対応しうる。そして意味解釈の際にも、前者の「個体モデ

ル」では、名詞句の意味は文の意味解釈に関与せず、したがって文字通りの意味で解釈されるが、後者では名詞句の意味が文の意味解釈に関与し、したがって文字通りの意味は解釈されない。この場合、前者のように文の意味解釈に関与しない名詞句を「個体」、文の意味解釈に関与する名詞句を「社会・家族関係役割語」(略して「関係役割語」)と呼んだ(鄭 1999, 2006)。すなわち、後者では、使役者と被使役者の二者間の社会・家族関係とその役割に関する我々の知識構造(理想認知モデル)が関与し、それによって使役状況が解釈されるということである。

次の例を見られたい。(15)では同じ動詞が用いられているが、「関係役割語」が機能するかどうかによって、それぞれの使役状況が異なってくる。(15a)では文字通りの意味が解釈されるが、ここでは個人としての私たちが個人のチョムスキーを我が家に連れてきたという、随伴の状況として解釈される。一方、(15b)では文字通りの意味としては解釈されない。ここでは、たとえば講演のためになどの、ある慣習的な目的があると解釈され、そのために、たとえば招待状の公文書を送る、手紙を出す、電話で頼むなどの、社会共有の何らかの指示的方法を使って、チョムスキーをバークレーに連れてきた(招待した)と理解されるのである。すなわちここでは、個人名としての私たちとチョムスキーの関係ではなく、カリフォルニア大学バークレー校の言語学関係者としての私たちと言語学者としてのチョムスキーという関係役割語が機能しており、これらの二者間の社会・家族関係が担う役割からそのような使役状況が解釈されるのである。したがって、この場合の指示を、生産的使役の「個体的指示」と区別して、「社会的指示」と呼ぶ。

- (15) a. We brought Chomsky to our house.(随伴)
 b. We brought Chomsky to Berkeley. (指示) Shibatani (1973a: 58)

社会モデルは、普通は語彙的使役において成立する傾向が見られるが、日本語では生産的使役でも不可能ではない。次のように、(16a)では夫と妻の関係から普通に想像できる使役状況が理解され、夫が何か悪いことをして(たとえば浮気など)妻を悲しませた、のように間接的な状況が優先的に解釈される。しかし、(16b)のように、太郎と次郎という個人名が与えられると、間接的な状況よりも、たとえば太郎が次郎を殴ったことによって、文字通りに次郎が泣いた、という解釈が得られ、直接的な状況として理解されやすい。これを「物理的操作」とすると、前者の間接的な状況は「社会的操作」と呼ぶことができる。一方、(16c)は両方の解釈が可能である。すなわち、太郎と花子の二者間の関係を、(16a)のように夫と妻と同等の関係として見るか、(16b)のように子供同士の喧嘩として見るか、によって異なる使役状況が解釈できるからである。

- (16) a. 夫が妻を泣かせた。(間接的、社会的操作)
 b. 太郎が次郎を泣かせた。(直接的、物理的操作)
 c. 太郎が花子を泣かせた。(間接的、社会的操作／直接的、物理的操作)

ところが、このような意味現象も、次のように被使役者標示が与格に入れ替わると、名詞句の意味によって使役状況が変わるようなことは起こらず、一貫した解釈が得られることがわかる。

- (17) a. (借金取りをだますために) 夫が妻に泣かせた。(間接的、個体的指示)
 cf. 監督が女優に泣かせた。(間接的、個体的指示)
 b. (先生をからかうために) 太郎が次郎に泣かせた。(間接的、個体的指示)
 c. (お母さんを驚かせるために) 太郎が花子に泣かせた。(間接的、個体的指示)

以上から、名詞句には表示レベルと機能レベルの区別があることがわかる。これを表3のように示しておく。

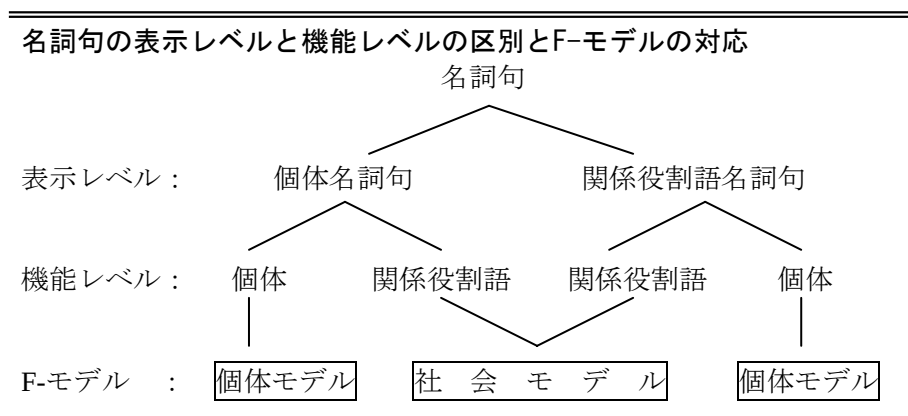


表3 (鄭2006: 232)

すなわち、表示レベルでは、(15)のチョムスキーのように、個体名詞句が与えられていても、機能レベルの解釈では個体と解釈される場合もあれば、関係役割語として解釈される場合もある。逆に、表示レベルでは、(16a)と(17a)のように、関係役割語名詞句が与えられていても、機能レベルの解釈では個体として解釈される場合もあれば、関係役割語として解釈される場合もある。したがって、社会モデルが成立するのは、関係役割語が適切に機能する場合の、機能レベルにおいてのみであることになる。

これについては、さらに次の例を見られたい。(18)では、表示レベルでは両文とも個体名詞句の花子が用いられている。この場合、(18a)では機能レベルでも個体名としての花子が解釈されるので、文字通りに駐車したという解釈が得られる。しかし、(18b)では関係役割語が機能し、お客さんとしての花子が解釈され、したがってタクシーを止めるときの我々の知識構造が関与し、たとえば手を上げるなどの何らかの指示が行われ、それによって運転手がタクシーを止めたことと理解される。この場合、ここにはメトニミーのメカニズムが関与し、タクシーという社会的な乗り物によって言語化されていない被使役者の運転手とお客さんが読み込まれたことと考えることもできる。(19)でも同様に、(19a)では文字通りの意味で解釈されるが、(19b)では、ヒトラーがファシストとして解釈され、歴史的事実に関する我々の知識構造が喚起されると、言語化されていない兵士が読み込まれることになる。(20)も、将軍と兵士の関係、看病人と患者の関係から、適切な知識構造が喚起され、同伴行為の使役状況が読み込まれたのだと考えられる。

- (18) a. 花子が駐車場に車を止めた。(物理的操作)
 b. 花子がタクシーを止めた。(社会的指示)
- (19) a. ある男が下校途中の子供を殺した。(物理的操作)
 b. ヒトラーが何百万人ものユダヤ人を殺した。(社会的指示)
- (20) a. The general *marched* the soldiers to the tents. (Levin & Rappaport Hovav 1995: 80,111)
 b. He *walked* a sick man. (影山2000: 54)

また次の韓国語の例は、(21b)のように、生産的使役では文字通りの意味を表し、指示的状況が読み取れるが、語彙的使役を用いた(22a)では、文字通りの意味を表さず、使役状況が不透明になっている。すなわち、この文には、誰かが財政的なサポートをし、それによって衣食住が提供され、そのために実際に食べて、着て、寝ることができるということが含意されている。この場合「誰か」に対応する使役者は、意味的に全く不明な個人ではな

く、普通に予想できる社会的人物であることがわかる。たとえば、普通ならば課長の父親であり、孤児院ならば院長、北朝鮮ならば金正日将軍様という答えも可能であろう。つまり、財政的なサポートから、実際に衣食住の世話を担当することになる母親や保母さんのような介在者は、この表現から省略され、社会的人物、すなわち「社会的使役者」(Social causer)が表現の対象となるのである(この点については、Ikegami 1982も参照)。

- (21) a. Nwu-ka nehuytul-ul mek-i-ko, ip-hi-ko,
 誰-主格 君たち-対格 食べる-使役-接続 着る-使役-接続
 ca-ywue-cwu-n-tako sayngkakha-ni? (語彙的使役: 社会的操作)
 寝る-使役-やる-現在-引用 思う-疑問
 ‘誰が君達を食べさせて、着させて、寝させていると思う?’
- b. Nwu-ka nehuytul-eykey mek-key ha-ko, ip-key ha-ko,
 誰-主格 君たち-与格 食べる-使役-接続 着る-使役-接続
 ca-key ha-n-tako sayngkakha-ni? (生産的使役: 個体的指示)
 寝る-使役-現在-引用 思う-疑問
 ‘誰が君達に食べさせて、着させて、寝させていると思う?’

ここで、社会モデルの特徴を次のように示すことができる。

- (22) 社会モデルの特徴((19b)(21a)の場合)
- 存在論的には間接的な状況である。
 - 表現の意味は直接的である。
 - 関係役割語が機能し、社会的使役者が関与する。
 - 使役状況の中間段階が短縮され、意味的に不透明である(文字通りの意味を表さない)。
 - 物理的空間を対象とする個体モデルと写像関係にあり、物理的操作・個体的指示に対する、社会的操作・社会的指示の状況を表す(表5参照)。

5. どのように概念化されるか？

では、社会モデルでは、中間段階にある現実世界の被使役者はどのように概念化され、また、どのように他動詞構文形式の中にその意味情報を包み込むことができるだろうか。まず、次を見られたい。(23)は個体モデル、(24)は社会モデルの例である。

- (23) a. 人夫が岩を割った。
 b. 人夫が (ハンマーで) 岩を割った。
- (24) a. ヒトラーが何百万人ものユダヤ人を殺した。
 b. ヒトラーが (兵士に命じて) 何百万人ものユダヤ人を殺した。

(23)のハンマーは、人夫と岩の間に介在し、人夫から力を受け持って岩に直接作用する「物理的道具」であり、言語化されてもされなくてもよい。同様に、(24)の兵士も、ヒトラーとユダヤ人の間に介在し、ヒトラーの命令を受け持ってユダヤ人に直接作用する「社会的道具」であり、これも言語化されてもされなくてもよい。また、両者を言語化する際には、付加詞句に対応させている点も一致する。唯一の違いは、それが自律的な動作主になれるかどうかということのみであり、これによって前者は直接操作の状況として、後者は間接的な状況として解釈される。ここで、兵士のように代理業務などを行う社会的道具を「社会的エージェント」と呼ぶと、社会モデルの社会的エージェントは、ハンマーのような物理的道具に依拠して概念化されることができる。

この状況をビリヤードボール・モデル式の使役連鎖で図示して見ると(cf. 表2)、両者の関係は平行していることがわかる。ただし、<<>>は言語表現では短縮されるか付加詞句で表現される中間段階のイベントであり、下線の部分は物理的道具と社会的エージェント(社会的道具)をそれぞれ表す。

(25) 個体モデルA: 物理的道具が介在する場合(直接操作)

- I 人夫が <<ハンマーを握る>>
 ↓
 II <<ハンマーが人夫からエネルギーをもらった状態である>>
 ↓
 III <<エネルギーをもらったハンマーが>> 岩を打つ
 ↓
 IV 岩が割れる

(26) 社会モデル: 社会的エージェント(社会的道具)が介在する場合(間接的状況)

- I ヒトラーが <<兵士に命令をする>>
 ↓
 II <<兵士がその命令を受け取った状態である>>
 ↓
 III <<兵士が>> ユダヤ人を殺す
 ↓
 IV ユダヤ人が死ぬ

ところが、(26)が表す使役状況そのものは「ヒトラーが兵士に何百万人もユダヤ人を殺させた」という文を算出することもできる。この文が表す状況を(27)のように示すと、(26)の社会モデルと(27)の個体モデルの関係も平行しているといえる。しかし、個体モデル同士(25)と(27)は平行的な関係を結ばない。

(27) 個体モデルB: 動作主の被使役者が関与する場合(間接的状況)

- I ヒトラーが兵士に命令をする
 ↓
 II 兵士がその命令を受け取った状態である
 ↓
 III 兵士がユダヤ人を殺す
 ↓
 IV ユダヤ人が死ぬ

すなわち、(25)と(26)の関係は、後者が前者に依拠して概念化されており、この場合両者には同じ使役形式が対応しうる。しかしながら、両者が伝える意味は異なり、前者は語彙的使役形式が表す文字通りの意味(直接操作の状況)で解釈されるのに対して、後者は文字通りの意味で解釈されない。一方、(26)と(27)の関係は、客観的には同じ状況であるが、この状況には異なる二つの形式(または構文)が対応しうる。ここに、概念化レベルの異なる二つのモデル、すなわち、物理的空間を対象とする「個体モデル」と社会的空間を対象とする「社会モデル」を仮定する理由がある。これによれば、客観的には異なる使役状況(直接的な状況と間接的な状況)に、概念化レベルが異なる二つの機能モデルが対応することによって、同じ構文を算出できるということが予測される。すなわち、ここでは一つの使役形式(語彙的使役)が対応し、同じ他動詞構文を作ることができる。また、客観的に同じ状況に、社会モデルが適用されるか、個体モデルが適用されるか、によって算出される文の形式は異なりうるということも予測できる。すなわち、客観的には同じ状況であり、参加者の数が

同じであっても、個体モデルで概念された場合と社会モデルで概念された場合とでは、使役形式の相違だけでなく、項構造の異なる構文も得られる可能性が予測されるのである。

ここで、二つの異なる概念化レベルがあることを認めると、文の算出モデルは表4のように示すことができる。

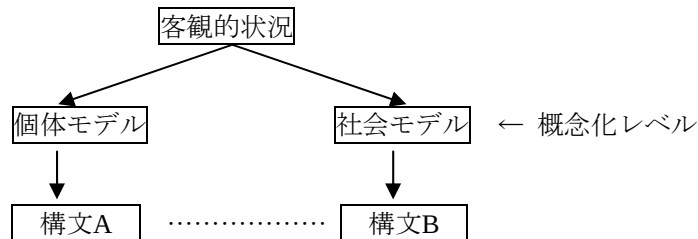


表4 「名詞の文法」における文の算出モデル(鄭2006: 10)

すなわち、(26)と(27)に基づけば、構文Aでは「ヒトラーが兵士に何百万人ものユダヤ人を殺させた」が作られ、構文Bでは「ヒトラーが何百万人ものユダヤ人を殺した」が作られる。そして、構文Aと構文Bの間には、被使役者の文法的コード化を入れ替えながら多様な構文が連続的に分布する。(28)を参照されたい。

- (28) a. ヒトラーが{ ϕ /兵士に命じて/*兵士をして/*兵士に}何百人ものユダヤ人を殺した。
 b. ヒトラーが{??兵士に命じて/兵士をして/兵士に}何百人ものユダヤ人を殺させた。

ここで、社会モデルが二つの個体モデルに依拠していることを、表5のように示すと、二つの機能モデルの関係は、メタファーが結ぶ起点領域から目標領域への写像関係であることがわかる((22)参照)。すなわち、社会モデルは二つの個体モデルを起点領域として写像された、社会的空間を対象とする概念領域である。この場合、一方の個体モデルからは、使役形式とそれが表す直接的な意味が写像され、もう一方の個体モデルからは、使役状況とそれが表す間接的な意味が写像され³、二つが社会モデルで混合される。そのため、社会モデルでは形式と意味の間に不一致が生じるのである(3節参照)。

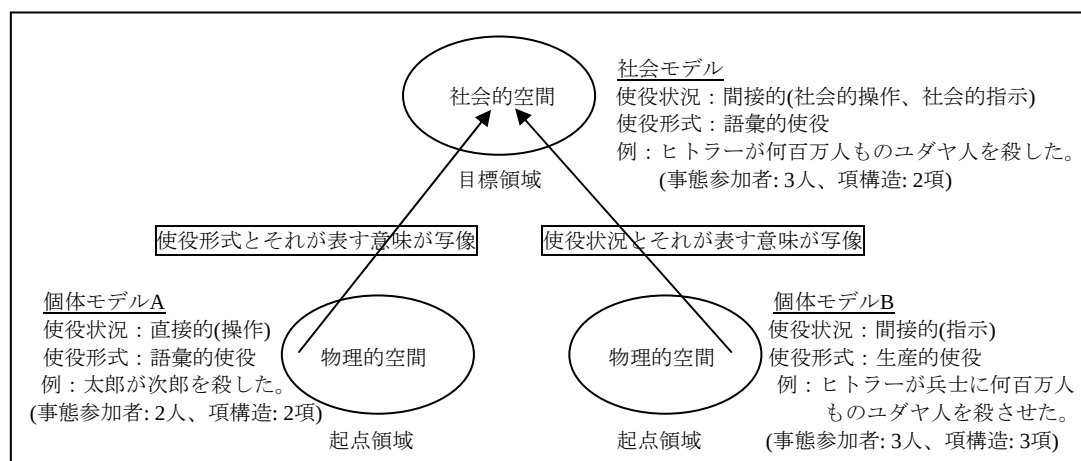


表5 二つの個体モデルから社会モデルへの写像と形式と意味の混合によるねじれ

最後に、社会モデルではなぜ、表現されていない意味情報がいとも簡単に取り出されるのだろうか。これについては、次のように「くりこみ理論」を仮定して説明する。

(29) くりこみ理論(Nesting theory)

社会モデルでは、使役連鎖の中間段階を短縮でき、そのときの短縮された意味情報は関係役割語の中に書き込まれる。また、その名詞句の機能レベルを通して、その意味情報はいとも簡単に取り出すことができる。

6. 結論

本稿では、一つの使役形式に二つの異なる使役状況（直接的と間接的）が解釈される場合(たとえば、秀吉が大阪城を建てた)と、客観的には同じ状況に二つの異なる使役形式(または統語構造)が対応する場合(たとえば、「ヒトラーが何百万人のユダヤ人を殺した」と「ヒトラーが兵士に何百万人のユダヤ人を殺させた」)を考察し、このような現象を引き起こす背後には名詞句の意味が関与していることを明らかにした。さらに、名詞句の意味は、文の意味解釈だけにとどまらず、文の算出の際にも関与的である。このことから、概念化レベルの異なる二つの機能モデルとして「個体モデル」と「社会モデル」を認めると、(14)のように、項構造は一致するが異なる使役形式が対応することも説明できる(cf. 定延2000)。

以上によって、形式と意味の対応を考える際には、鄭(2006)で提案された、「社会モデル」を導入する必要があることを主張した。

注

* 本稿は、秋田大学国際シンポジウム(2007年7月10-11日)「ことばと文学・ことばとパワー」で発表した論文に加筆・修正を施したものである。また千田俊太郎氏には本稿の初稿を読んでいただき、有益なコメントをいただいた。この場を借りて御礼を申し上げる。

1 客観的には同じもの(たとえば、金星)が、異なる名前(たとえば、宵の明星と明けの明星)で呼ばれる場合、二つが同じ意味を表すか異なる意味を表すか、という問題は、フレーゲ(1988)に起源を持つが、これと同じ問題がここにもあり、また韓国語の使役をめぐる70年代のShibatani (1973b, 1975)とYang (1972, 1974, 1976)のいわゆる異義説対同義説の論争の際にもあった。Yangは客観的に同じ状況(たとえば、指示的状況)に二つの異なる形式(語彙的使役と生産的使役)が対応した場合、二つの形式は同じ意味を表す(すなわち、語彙的使役も生産的使役と同様、間接使役を表す)という同義説を唱え、この場合表現形式の違いは文体の差に過ぎないと主張した。一方、Shibataniは客観的に同じ状況でも、異なる言語形式が用いられた場合はそれぞれ異なる意味を伝える(すなわち、語彙的使役は直接使役、生産的使役は間接使役を表す)という立場から異義説を唱えたのである。この論争について詳細は鄭(近刊)を参照。

2 しかしこの二つの文は次のように名詞句を入れ替えると、その状況はさらに逆転する。すなわち、(11a)をCangkwan-i pwuhatul-uy pal-ul ssis-ki-ess-ta.(将軍-NOM 部下たちの足-ACC 洗う-CAUS-PAST-DEC)に直すと、むしろ間接的な状況が優先的に解釈され、将軍が部下たちの足を直接洗ってやったという解釈は困難である。(12a)もEmeni-ka(meli kkakki-lul silhehanun ai-eykey ekcilo) ay meli-ul kkakki-ki-ess-ta.(母親-NOM (髪を切ることを嫌がる子供に無理やりに)子供の髪-ACC 切る-CAUS-PAST-DEC)に直すと、母親がはさみを持って直接子供の髪を切った状況として解釈できる。

3 「メタファー的写像はソース領域の認知トポロジー(つまり、イメージ・スキーマ構造)を維持する」という、Lakoff (2000: 24)の不変性仮説を参照。

参考文献

- 影山太郎 2000 「自他交替の意味的メカニズム」丸田忠雄、須賀一好(編)『日英語の自他の交替』東京：ひつじ書房. 33-70.
 河上誓作 1996 「『言語使用の創造的側面』と言語理論」月刊『言語』25-4. 大修館書店. 52-59.
 定延利之 2000 『認知言語論』東京：大修館書店.
 佐藤琢三 2005 『自動詞文と他動詞文の意味論』東京：笠間書院.
 澤田 淳 2006 「日本語の他動詞構文の事象構造に関する認知言語学的考察」『言語科学論集』12: 19-34.
 鄭聖汝 1999 『他動性とヴォイス(態)——意味的他動性と統語的自他の韓日比較研究——』博士論文、神戸大学.
 鄭聖汝 2005 「규범적 사동구문과 비규범적 사동구문」(規範的使役構文と規範的使役

- 構文) *Language Research* 41-1. Language Research Institute Seoul National University. 49-78.
- 鄭聖汝 2006 『韓日使役構文の機能的類型論研究——動詞基盤の文法から名詞基盤の文法へ——』 くろしお出版.
- 鄭聖汝 近刊 「직접사동과 간접사동, 무엇이 문제였나?」 (直接使役と間接使役、何が問題だったのか)
- フレーゲ, G. (著), 藤村龍雄(訳) 1988 『フレーゲ哲学論集』 東京: 岩波書店.
- Croft, William 1991 *Syntactic Categories and Grammatical Relations: the Cognitive Organization of Information*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Ikegami, Yoshihiko 1982 Indirect Causation and De-agentivization: The Semantics of Involvement in English and Japanese. *Proceedings of the Department of foreign Languages and Literature, College of Arts and Science*, 29-3. Tokyo: University of Tokyo. 95-112
- Lakoff, George (著), 杉本孝司(訳) 2000 「不変性仮説——抽象理論はイメージ・スキーマに基づくか?——」 坂原茂(編) 『認知言語学の発展』 ひつじ書房. 1-59.
- Langacker, Ronald W. 1991 *Foundations of Cognitive Grammar vol.2: Descriptive Application*. Stanford. California: Stanford University Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav 1995 *Unaccusativity: at the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Shibatani, Masayoshi 1973a *A Linguistic Study of Causative Constructions*. Ph.D., University of California, Berkeley.
- Shibatani, Masayoshi 1973b Lexical versus Periphrastic Causatives in Korean, *Journal of Linguistics* 9: 281-297.
- Shibatani, Masayoshi 1975 On the Nature Synonymy in Causative Expressions. *Language Research* 11-2. Language Research Institute Seoul National University. 267-274
- Shibatani, Masayoshi 1976 The grammar of causative constructions: a conspectus. In M. Shibatani (ed.) *The grammar of causative constructions (Syntax and Semantics 6)* New York: Academic Press. 1-40.
- Shibatani, Masayoshi and Chung, Sung-Yeo 2002 Japanese and Korean Causatives Revisited. In N. M. Akatsuka and S. Strauss (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 10. CSLI Publications and SLA: Stanford. 32-49
- Shibatani, Masayoshi and Pardeshi, Prashant 2002 The Causative Continuum. In M. Shibatani(ed.) *The Grammar of Causation and Interpersonal Manipulation*. (Typological studies in language 48). John Benjamins. 85-126.
- Song, Seok-Choong 1988 *Explorations in Korean Syntax and Semantics*, Institute of East Asian Studies KRM 14, University of California Berkeley.
- Talmy, Leonard 1985 Force Dynamics in Language and Thought. In William H. Eilfort, Paul D. Kroeber, and Karen L. Peterson(eds.) *Papers from the Twenty-First Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*. Chicago: Chicago Linguistic Society. 293-337.
- Yang, In-Seok 1972 *Korean Syntax: Case Markers, Delimiters, Complementation, and Relativization*. Seoul: Paek Hap Sa.
- Yang, In-Seok 1974 Two Causative Forms in Korean. *Language Research* 10-1: 83-117. Language research institute Seoul National University.
- Yang, In-Seok 1976 Semantics of Korean causation. *Foundations of Language* 14: 55-87.

